

律令国家と古代山城

荒木 敏夫（専修大学教授）

はじめに

白村江の戦【はくそんこうのたたかい・はくすきのえのたたかい】

663(天智 2)8 月に,朝鮮半島西南部の錦江河口(白村江)で行われた,倭・百済軍と唐・新羅軍との海戦。660 年に滅亡した百済の復興を願う鬼室福信らの要請により,倭は人質であった王子豊璋(余豊璋)を擁立し軍を派遣して百済を救援した。しかし豊璋と福信の不和が生じて福信が殺されると,唐と新羅の連合軍は百済軍の根拠地で錦江下流にある周留城(州柔城つぬさし)の攻略をめざした。倭軍は唐の劉仁軌の水軍と白村江で 2 日間にわたって戦い大敗を喫した。その結果,周留城は陥落,豊璋は高句麗へ逃げ,百済は完全に滅亡し,倭国へ百済の王族・貴族が多数亡命した。倭国は,北九州・瀬戸内海沿岸に城を築き,都を近江の大津宮へ遷して防衛体制を固め,政治体制の改革に努めた (『日本史辞典』岩波書店)。

1 七世紀(後半)の古代日本と鞠智城の築造

「白村江の戦役」の性格

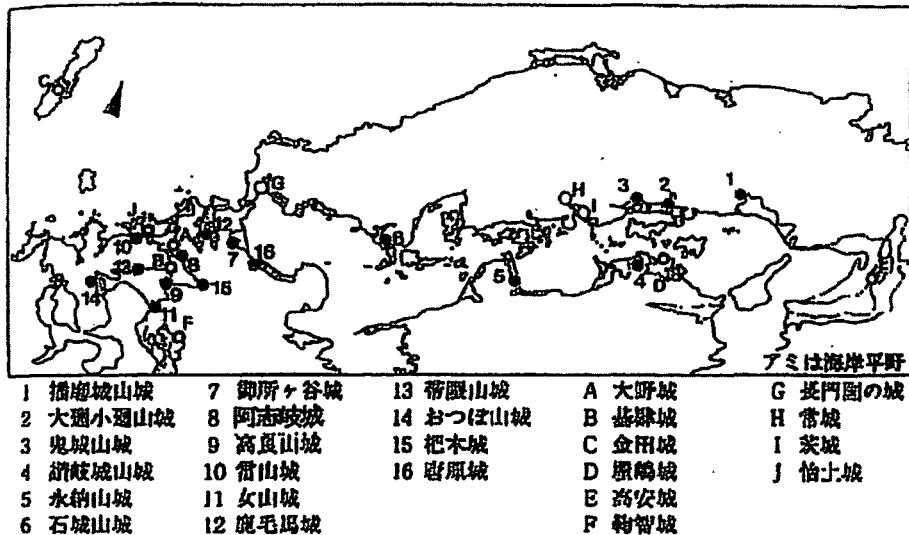
齊明女帝の戦争から中大兄(葛城)皇子の戦争へ
齊明女帝の親征—究極の「王事」の実現—
中大兄「称制」

2 「白村江敗戦」後の倭国—中大兄「称制」下の非常時の王権—

唐・新羅との交渉
防衛体制の整備
朝鮮式山城の築造と整備

むすびに代えて—鞠智城が象徴するもの—

予兆と王権・国家
「兵庫」の鳴動



朝鮮式山城【ちょうせんしきやまじろ】

663(天智 2)の白村江の戦に敗れた後,外敵防備のために築いた城の形式。大野城や基肆城など百済の亡命貴族の技術指導により築城されたという日本書紀の記事と,現存する土塁・石塁・城門・倉庫等の形態や構造が朝鮮の三国時代に発達した山城に類似していることによる呼称。ほかに鞠智城・金田城・屋島城・高安城が知られる (『日本史辞典』岩波書店)。

神籠石【こうごいし】

7世紀に外敵防備のため北九州から瀬戸内海沿岸に築造された山城の1型式。7世紀の山城には構造上,朝鮮式山城と神籠石の2形式がある。神籠石式山城の最大の特徴は,山頂ないし山腹に方形の切り石を並べ巡らした列石と,その上に版築された土塁からなる城壁である。土塁の基礎の列石は密接させ,外面を合せて外観を整えている。御所ヶ谷(福岡県)や岩城山(山口県)のように列石を土塁の中に埋没させる工法もあった。おつぼ山神籠石など,福岡県6,佐賀県2,山口県1,岡山県2,兵庫県1,愛媛県1,香川県1の計14か所が知られている。神籠石の称は,高良山(こうらさんー福岡県久留米市)の列石が高良大社の霊域区画施設と考えられたことから生じたもの (『日本史辞典』岩波書店)。

古代山城

朝鮮式山城 A ～ J

神籠石（系山城） 1 ～ 16

- | | | |
|----|-----------|-----------------------|
| 1 | 播磨城山城 | 兵庫県新宮町馬立・龍野市揖中垣内 |
| 2 | 大廻小廻山城 | 岡山市草ヶ部 |
| 3 | 鬼城山城（鬼ノ城） | 岡山県総社市奥坂・黒尾 |
| 4 | 讃岐城山城 | 香川県坂出市西庄町・府中町・川津町、飯山町 |
| 5 | 永納山城 | 愛媛県東予市楠 |
| 6 | 石城山神籠石 | 山口県熊毛郡大和町石城 |
| 7 | 御所ヶ谷神籠石 | 福岡県行橋市津積・勝山町大久保・犀川町木山 |
| 8 | 阿志岐城 | 福岡県筑紫野市 |
| 9 | 高良山神籠石 | 福岡県久留米市御井町高良山 |
| 10 | 雷山神籠石 | 福岡県前原市雷山 |
| 11 | 女山神籠石 | 福岡県山門郡瀬高町大草字女山 |
| 12 | 鹿毛馬神籠石 | 福岡県嘉穂郡潁田町鹿毛馬 |
| 13 | 帯隈山神籠石 | 佐賀県佐賀市久保泉町川久保町・神埼町西郷 |
| 14 | おつぼ山神籠石 | 佐賀県武雄市橘町小野原 |
| 15 | 杷木神籠石 | 福岡県朝倉郡杷木町林田・穂坂 |
| 16 | 唐原神籠石 | 福岡県築上郡大平村下唐原・土佐井 |
| | | |
| A | 大野城 | 福岡県太宰府市太宰府、大野城市瓦田、宇美町 |
| B | 基肆（椽）城 | 佐賀県基山町小倉・福岡県筑紫野市山口 |
| C | 金田城 | 長崎県下県郡美津島町黒潮 |
| D | 屋嶋城 | 高松市屋島 |
| E | 高安城 | 奈良県生駒郡平群町久安寺 |
| F | 鞠智城 | 熊本県菊鹿町米原字長者原・菊池市木野字深迫 |
| G | 長門国の城 | |
| H | 常城（所在不明） | 備後国鞆田郡（山陽道） |
| I | 茨城（所在不明） | 備後国安那郡（山陽道） |
| J | 怡土城 | 福岡県糸島郡前原市高来寺・大門・高祖 |

1 七世紀（後半）の古代日本と鞠智城の築造

「白村江の戦役」の性格

齊明女帝の戦争から中大兄（葛城）皇子の戦争へ

齊明女帝の親征－究極の「王事」の実現－

中大兄「称制」

（天智即位前紀）七年七月丁巳崩。皇太子素服称制。＜中略＞。皇太子遷居于長津宮。稍聽水表之軍政。

齊明女帝 筑紫への行幸－筑紫での死

この事実の歴史的意義＝齊明女帝－中大兄の歴史的評価に関わる

中大兄王 事実上の戦闘指揮官－齊明の死後、大王代行

↓

「称制」(マツリゴトキコシメス)

その後の指揮－中大兄皇子であったことの意味

大王の長期不在の中での内外の懸案を処理しう政治形態が始めてうまれる

百済派遣軍の失敗の政治的責任をおうことになる

死去後も戦闘を続行することを可能としたもの

女帝齊明の名目性？→大王の地位が名目的なものとはならない＝通説

中央豪族層の深い利害に関わる？

百済復興に関与の段階から唐の帝国主義との対決への段階に移行

↓

唐と倭国の全面的対決にはいたらなかった＝二重の「幸運」

新羅の対唐戦争の影響

唐の内部問題－高宗の統治から則天武後の時代への変化に伴う対外政策の修正の可能性

大王が自ら前線に赴く＝「親征」形態－積極的評価を与えるべきもの

多くは王の代理を派遣する＝「代理王」

代理が王族の場合――王族将軍

代理が臣下の場合――〇〇将軍

＝軍事王としての側面－古代最後の「親征」王

大王として果たさねばならない重要な側面

5世紀――倭王武（雄略）の上表文

以後、王の代理（分身）を派遣（ヤマトタケル伝承）

ないし、王の軍事指揮権を臣下に一時付託

☆これらの点からみれば、大王齊明は5世紀以来の伝統に則した大王である。

白村江の敗戦以後、古代においては海外派兵がなくなる。

||

4・5世紀以来の外交手段の喪失－「救軍」＝「スクイノイクサ」

軍事派兵に依存しない外交の模索

2 「白村江敗戦」後の倭国－中大兄「称制」下の非常時の王権－

唐・新羅との交渉

遣唐使の派遣

665年（天智4）、667年（天智6）、669年（天智8）

防衛体制の整備

筑紫大宰 → 大宰府

兵卒の配備－「救軍」体制 → 防人制

朝鮮式山城の築造と整備

660年（齊明6） 百濟滅亡

661年（齊明7） 齊明親征（筑紫の朝倉へ）

7月 齊明死去→中大兄（葛城）皇子の「称制」

8月 白村江の戦→大敗

（天智即位前紀）七年七月丁巳崩。皇太子素服称制。＜中略＞。皇太子遷居于長津宮。稍聽水表之軍政。

663年（天智2） 8月 白村江の海戦－大敗を喫す

（天智二年秋八月）＜中略＞。戊戌、賊将至於州柔、繞其王城。大唐軍将、率戰船一百七十艘、陣烈於白村江。戊申、日本船師初至者、與大唐船師合戰。日本不利而退。大唐堅陣而守。己酉、日本諸将、與百濟王、不觀氣象、而相謂之曰、我等爭先、彼必自退。更率日本乱伍、中軍之卒、進打大唐堅陣之軍。大唐便自左右夾船繞戰。須臾之際、官軍敗績。赴水溺死者衆。艫舳不得廻旋。朴市田來津、仰天而誓、切齒而嘖、殺數十人。於焉戰死。是時、百濟王豐璋、與數人乘船、逃去高麗。

664年（天智3）12月 対馬・壱岐に防人と烽を置き、大宰府に水城を築く
是歳、於対馬島・壱岐島・筑紫国等、置防與烽。又於筑紫、築大堤貯水。名曰水城。

出夜、雨、箇銘、匙、自天、落、前、婦、取、而、興、殿、	、得、始、富、是、歲、於、對、馬、嶋、壹、岐、嶋、筑、紫、	國、等、置、防、与、烽、又、於、筑、紫、築、大、堤、貯、水、	名、曰、水、城、	四年、春、二、月、关、西、朔、丁、酉、間、人、大、后、薨、	是、月、勅、授、百、濟、國、官、位、階、級、仍、以、佐、平、	福、信、之、功、授、鬼、室、集、斯、小、錦、下、 <small>其、平、信、</small>	復、以、百、濟、百、姓、男、女、四、百、餘、人、居、于、道、	江、國、神、前、郡、三、月、关、西、朔、為、間、人、大、后、	度、三、百、廿、人、是、月、給、神、前、郡、百、濟、人、田、	秋、八、月、遣、達、率、登、峯、春、初、築、城、於、長、門、	國、遣、達、率、憶、礼、福、留、達、率、四、比、福、失、於、	筑、紫、國、築、大、野、及、塚、二、城、耽、羅、遣、使、來、	朝、九、月、庚、午、朔、壬、辰、唐、國、遣、朝、散、大、夫、	所、州、司、馬、上、柱、國、劉、德、高、等、 <small>等、詔、右、武、</small>	保、國、百、濟、將、軍、朝、散、大、夫、上、柱、國、郭、務、	保、九、二、百、五、十、四、人、七、月、七、八、月、至、于、
-----------------------------	-------------------------------	--------------------------------	----------	-------------------------------	--------------------------------	--	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--	--------------------------------	--------------------------------

「水城」



「烽」

『肥前国風土記』 「烽貳拾所」

養父の郡△郷は四所△里は一十二、△烽は一所なり。

神埼の郡△郷は九所△里は廿六、△驛是一所、烽是一所、寺是一所△僧の寺△なり。

小城の郡△郷は七所△里は廿、△驛是一所、烽是一所なり。

松浦の郡△郷は一十一所△里は廿六、△驛は五所、烽は八所なり。

値嘉の郷△郡の西南のかたの海の中にあり。烽の處三所あり。

藤津の郡△郷は四所△里は九、△驛是一所、烽是一所なり。

高來の郡△郷は九所△里は廿一、△驛は四所、烽は五所なり。

『豊後国風土記』

郡は八所△郷は四十、里は一百一十、△驛は九所△竝に小路、△烽は五所△竝に下國、△寺は二所なり△僧の寺と尼の寺となり

大野の郡△郷は四所△里は一十一、△驛は二所、烽は一所なり。

海部の郡△郷は四所△里は一十二、△驛は一所、烽は二所なり。

大分の郡△郷は九所△里は廿五、△驛は一所、烽は一所、寺は二所なり△一つは僧の寺、一つは尼の寺なり。

速見の郡△郷は五所△里は一十三、△驛は二所、烽は一所なり。

665年（天智4）12月 筑紫に大野城・椽城を築く

秋八月、遣達率答火本春初、築城於長門国。遣達率憶礼福留・達率四比福夫於筑紫国、築大野及椽二城。

大唐故右威衛將軍上柱國祢公墓誌銘
公諱軍字溫能津陽人也其先與華同祖永嘉末避亂適東國遂家焉若夫
魏鑑鯨山跨青丘以東峙森蘇隄水臨丹渚以南流浸煙雲以橫英降之於
漢昭日月而植樵秀之於華雲文逸文高前芳於七子汗馬雄武擅後異於
三韓華構增輝莫材繼響綿圖不絕平代有聲曾祖福祖崇父善皆是本藩一
品官号佐平五緡地義以光身佩天爵而懃國忠俸鐵石操埒松筠範物者道
之有威則士者文武不墜公狼輝翼祉鸞生姿涯潯澄陂裕光靈日干斗
識靈杖劍知歸星中標羊角之英風影征雲外去顯慶五年官軍平本藩日見撲
武衛達川而析衛都尉于時日在餘糧而樂以連誅風治道壯貞盤桓而阻
國萬騎巨野與蓋馬以警塵千般橫波援原蛇而縱涉以公格謨海左龜鏡
東特在蘭亭往戶招慰公向臣節而授令歌皇華以載馳飛沈海之蒼鷹
有凌山之赤雀决河骨而天吳靜鑿風隨而雲路通曉免失侶濟不終夕遂能
行蒙天恩詔授左威衛將軍千餘騎帝一且稱臣仍領大府兼檢校都督府
司馬祢光千里之足仁副百城之心舉燭靈臺器標於荒域懸月神府芳掩於
桂府衣錦畫行富貴無草薶蒲夜夜子育有方去歲夢三年十一月廿一日
詔授右威衛將軍局影形開節躬監陞乘榮晉驟歷便繁方謂克壯清
猷永經多祐豈意歲暮馳易往霜凋馬陵之樹川閣難留風驚龍驤之水以微
春秋六十有六 皇情念切惟舊傷悼者久之贈綬布三百段粟三百斛
事所頂益令官給仍便和文館學士藝檢校本衛長史王行本並護雅公雅識
淹通溫儀韶峻明珠不類白珪無玷十步之芳蘭室欽其是味四鄰之新桂
尚其英華奄瘞陞扶之翼連春之帶粵以長年十月甲申朔二日乙酉落
於雍州乾封縣之高陽里禮也馬悲鳴九原長往月輪夕駕星精夜上日落
山子草色寒風度原子松聲響沙文榭子可通隨武山子安仰愴清風之歇
樹芳名於青像其詞曰
曾胤青丘芳基華麗脈遠邇會逢時濟族薄秀許某相繼歎風動塵思
無替一惟公苗裔桂蘭芳緒榮七貴乃子傳播流芳後代播美來昆葉聲雖
歌今薨猶存其臚箭驚秋陣駒過暮名將日遠德隨年故椿松吟於從風悲
哥於朝露靈輜子遠轉斯驂子踟躕嘆陵谷之賀遷觀音微之序

「祢軍墓誌」

『日本書紀』天智四年（665）九月庚午朔壬辰、唐国遣朝散大夫^{きしゅう}沂州司馬上柱国劉德高

等。八等謂右戎衛郎將上柱國百濟祢軍・朝散大夫柱國郭務悰。凡二百五十四人。七月廿八日、至于對馬。九月廿日、至于筑紫。廿二日、進表函焉。▽

(天智四年)十一月己巳朔辛巳、饗賜劉德高等。

(天智四年)十二月戊戌朔辛亥、賜物於劉德高等。

(天智四年十二月)是月、劉德高等罷歸。

(天智四年)是歲、遣小錦守君大石等於大唐、云々。八等謂小山坂合部連石積・大乙吉士岐弥・吉士針間。蓋送唐使人乎。▽

百濟人禰軍(祢軍)、祖先は中国人、戦乱が続いた西晋永嘉年間(307-313)末に百濟移住。曾祖祢福、祖父祢譽、父祢善、いずれも一品の位、「佐平」官。百濟が660年に唐に滅ぼされ、禰軍が唐に渡ると、皇帝は榮達させ、右武衛滄川府折衝都尉に任じた。

参考史料

田中健夫編『善隣国宝記』所引の「海外国記」

海外国記曰、天智天皇三年四月、大唐客來朝、大使朝散大夫上柱國郭務悰等卅人・百濟佐平禰軍等百餘人、到對馬島、遣大山中采女通信侶・僧智辨等來、喚客於別館、於是智辨問曰、有表書并獻物、以不、使人答曰、有將軍牒書一函并獻物、乃授牒書一函於智辨等而奉上、但獻物檢看而不將也、

九月、大山中津守連吉祥・大乙中伊岐史博德・僧智辨等、稱筑紫大宰辭、實是勅旨、告客等、今見客等來狀者、非是天子使人、百濟鎮將私使、亦復所賚文牒、送上執事私辭、是以使人不得入國、書亦不上朝廷、故客等自事者、略以言辭奏上耳、

十二月、博德、授客等牒書一函、函上著鎮西將軍、日本鎮西筑紫大將軍、牒在百濟國大唐行軍總管、使人朝散大夫郭務悰等至、披覽來牒、尋省意趣、既非天子使、又無天子書、唯是總管使、乃爲執事牒、牒是私意、唯湏口奏、人非公使、不令入京、云々

667年(天智6) 11月 大和に高安城・讃岐に屋嶋城・對馬に金田城を築く
是月、築倭國高安城・讃吉國山田郡屋嶋城・對馬國金田城。

668年(天智7) 天智即位(→ この年、9月 高句麗、滅亡。近江遷都。

669年(天智8) 是冬、高安城を修理する

672年(天武元) 壬申の乱

673年(天武2) 天武即位

675年(天武4) 高安城へ御幸

689年(持統3) 飛鳥浄御原令の制定

690年（持統4） 持統女帝即位

694年（持統8） 藤原遷都

697年（文武元） 文武即位

698年（文武2） 5月 大野城・基肆城・鞠智城の三城を繕治する
（＝鞠智城の初見史料）

8月 高安城を修理する。

令大宰府繕治大野・基肆・鞠智三城。

有差三月し丑因悔因獻銅鑄丁卯越後因言疫
給藥救之已巳詔能前因京放出雲因言宇二郡
司置聰連任三寺已上親廣午任諸因郡司因詔
詔因司寺鈴振郡司勿有偏黨郡司居任必須如
法自今以後違越辛巳禁山背因賀茂祭日命
衆騎射全午詔以惠施法師為僧正智洲法師為
少僧都善往法師為律師夏四月壬辰近江紀伊
二因疫給藥瘡之休儒備分因人秦大兄賜姓
考登臣全寅進督廣武文忌寸博士等八人于南
鳴菟國因給我恩戊午奉馬于芳野水分岸神祈
雨也公月庚申朔諸因早因奉幣帛于諸社甲子
遣使于京歲祈雨於名山大川己亥遣使于諸因
巡遊田疇甲申令大宰府繕治大野基肆鞠智三
城六月丙申近江因獻白樊石全寅越後因蝦秋
獻方物丙辰奉馬于諸社祈雨也丁巳直廣冬田
中朝臣是廣平詔贈直廣壹以壬申年功也秋
七月己未朔日有蝕之丑以公私奴婢已還民

699年（文武3） 高安城・三野城・稻積城を修理する

九月丙寅。修理高安城。十二月甲申。令大宰府修三野・稻積二城。

701年（大宝元） 大宝律令の制定

史料 < 2 - 「防衛体制」の整備 >

592年（崇峻五年十一月）丁未、遣使於筑紫將軍所曰、依於内乱、莫怠外事。

672年（天武元年6月）丙戌、<中略>。（佐伯連）男至筑紫、時栗隈王、承符對曰、筑紫國者、元戎辺賊之難也。其峻城深隍、臨海守者、豈為内賊耶。今畏命而發軍、則國空矣。若不意之外、有倉卒之事、頓社稷傾之。然後、雖百殺臣、何益焉。豈敢背德耶。輒不動兵者、其是緣也。<後略>。

国内の動乱処理と切り離された外交上の対応

Ⅱ

筑紫への派遣の兵の性格――「救軍」（スクイノイクサ）

「救軍」

『日本書紀』卷十九欽明天皇八年（五四七）四月

八年夏四月。百濟遣前部德率眞慕宣文。奈率哥麻等。乞救軍。仍貢下部東城子言代德率■休麻那。

『日本書紀』卷十九欽明天皇九年（五四八）九年正月乙未三

春正月癸巳朔乙未。百濟使人前部德率眞慕宣文等請罷。因詔曰。所乞救軍必當遣救。宜速報王。

『日本書紀』卷二六齊明天皇六年（六六〇）十二月庚寅廿四

十二月丁卯朔庚寅。天皇幸于難波宮。天皇方隨福信所乞之意。思幸筑紫將遣救軍。而初幸斯備諸軍器。

『続日本紀』卷廿七天平神護二年（七六六）六月壬子廿八

壬子。刑部卿從三位百濟王敬福薨。其先者出自百濟國義慈王。高市岡本宮馭宇天皇御世。義慈王遣其子豐璋王及禪廣王入侍。■于後岡本朝廷。義慈王兵敗降唐。其臣佐平福信尅復社稷。遠迎豐璋。紹興絕統。豐璋篡基之後。以譖橫殺福信。唐兵聞之復攻州柔。豐璋与我救兵拒之。救軍不利。豐璋駕船遁于高麗。禪廣因不歸國。藤原朝廷賜号曰百濟王。卒贈正廣參。子百濟王昌成。幼年隨父歸朝。先父而卒。飛鳥淨御原御世贈小紫。子郎眞。奈良朝廷從四位下攝津亮。敬福者即其第三子也。放縱不拘。頗好酒色。感神聖武皇帝殊加寵遇。賞賜優厚。時有士庶來告清貧。每假他物。望外与之。由是。頻歷外任。家无餘財。然性了辨。有政事之量。天平年中。仕至從五位上陸奥守。時聖武皇帝造盧舍那銅像。冶鑄云畢。塗金不足。而陸奥國馳驛。貢小田郡所出黄金九百兩。我國家黄金從此始出焉。聖武皇帝甚以嘉尚。授從三位。遷宮内卿。俄加河内守。勝寶四年拜常陸守。遷左大弁。頻歷出雲。讃岐。伊豫等國守。神護初。任刑部卿。薨時年六十九。

むすびに代えて－鞠智城が象徴するもの－

予兆と王権・国家

「兵庫」の鳴動

予兆：物事のきざし。前知らせ。俗信知識の上で、出来事の原因となったとされる過去の現象。

『日本書紀』天智十年（六七一）是歳、讃岐国山田郡人家、有鶏子四足者。又大炊有八鼎鳴。或一鼎鳴。或二或三俱鳴。或八俱鳴。

『続日本紀』宝亀元年（七七〇）二月丙辰。《廿三》破却西大寺東塔心礎。其石大方一丈余。厚九尺。東大寺以東。飯盛山之石也。初以数千人引之。日去数歩。時復或鳴。於是。益人夫。九日乃至。即加削刻築基已畢。時巫覡之徒。動以石崇為言。於是。積柴燒之。灌以卅余斛酒。片片破却。棄於道路。後月余日。天皇不■。卜之破石為崇。即復拾置浄地。不令人馬踐之。今其寺内東南隅数十片破石是也。

『続日本紀』宝亀十一年（七八〇）六月辛酉。《廿八》授從五位上紀朝臣佐婆麻呂正五位下。无位名繼女王從五位下。伊勢国言。今月十六日己酉巳時。鈴鹿關西内城大鼓一鳴。勅陸奥持節副將軍大伴宿祢益立等。將軍等去五月八日奏書云。且備兵糧。且伺賊機。方以今月下旬進入国府。然後候機乘變。恭行天誅者。既經二月。計日准程。佇待猷俘。其出軍討賊。国之大事。進退動靜。続合奏聞。何經数旬絶無消息。宜申委曲。如書不尽意者。差軍監已下堪弁者一人。馳駢申上。

『続日本紀』宝亀十一年（七八〇）冬十月癸巳。《辛卯朔三》左右兵庫鼓鳴。後聞箭動声。其響達内兵庫。

『続日本紀』天応元年（七八一）三月乙酉。美作國言。今月十二日未三點。苫田郡兵庫鳴動。又四點鳴動如先。其響如雷霆之漸動。」伊勢國言。今月十六日午時。鈴鹿關西中城門大鼓。自鳴三聲。

『続日本紀』天応元年（七八一）夏四月己丑朔。左右兵庫兵器自鳴。其声如以大石投地也。遣散位從五位下多治比真人三上於伊勢。伯耆守從五位下大伴宿祢繼人於美濃。兵部少輔從五位下藤原朝臣菅繼於越前。以固關焉。以天皇不予也。

『続日本紀』天応元年（七八一）十二月庚戌。《廿六》兵庫南院東庫鳴。

鞠智城（菊池城）の兵庫、鳴動

『文徳實録』卷十天安二年（八五八）閏二月丙辰《廿四》◆丙辰。肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴。▲丁巳《廿五》丁巳◆。又鳴。

『文徳實録』卷十天安二年（八五八）六月己酉《廿》◆己酉。從五位下安倍朝臣良行爲參河守。』大宰府言。去五月一日。大風暴雨。官舎悉破。青苗朽失。九国二島盡被損傷。又肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。』

参考

『三代実録』卷二七貞観十七年（八七五）六月廿日辛未◆辛未廿日。大宰府言。大鳥二集肥後国玉名郡倉上。向西鳴。群鳥數百。噬拔菊池郡倉舎葺草。

笹本正治『鳴動する中世』朝日新聞社、2000年

西山克「中世王権と鳴動」今谷明編『王権と神祇』思文閣出版、2002年

黒田智『中世肖像の文化史』ペリカン社、2007年